

## 第 I 部

### 教職を目指す学生へ

# 教員採用合格者の経験を聞く

—2018年度「教員採用試験合格者の体験を聞く会」の記録—

## 学び続ける教師を目指して

中尾 貴太郎（文学部英文学科4年）

私は今年度、神奈川県の高校英語、長崎県の中学英語の教員採用試験を受験し、両自治体から合格をいただくことができました。なかなか勉強の成果が表れず不安になったときもありましたが、このような結果で終えることができたのは教職課程センターの職員の方々や支えてくれた家族や友人のおかげです。感謝してもしきれない思いでいっぱいです。ここでは、私が採用試験に合格するまでに行ったことや、やっておけばよかったと思うことなどをいくつかのポイントに分けて記していこうと思います。来年度以降の教員採用試験を受験される皆さんにとって一つでも参考にしていただければ幸いです。

### 1 勉強を始めた時期について

3年生の10月中旬に参考書や問題集を購入し、その年の年末までに受験する予定の自治体の過去問を3年分解きました。参考書や問題集を用いて本格的に勉強に取り組み出したのは冬休み明け頃であったと記憶しています。3月までに自治体の傾向から対策すべきところを理解した上で教職教養の勉強を一通り終えました。一般教養や科目は並行して受験自治体の過去問に加え、他の自治体の過去問も学習しました。3月頃から論文対策、6月頃から2次の面接対策を始めました。まずは、受験する自治体の過去問数年分を解いてどのような問題が出るのかを把握することをお勧めします。はじめは私も得点率が半分にも満たなかったですが、勉強を行い模試などで力を試し復習することを繰り返していくと、自然とどのような問題が出るのかが分かり自信を持って回答できるようになっていきます。

### 2 2つの自治体を受験するにあたって

2つの自治体を受験するという事は自分が合格する可能性を広げると同時に、対策と勉強が中途半端になってしまい合格する可能性を狭めてしまうと捉えることができます。2つの自治体を受験する予定の方はそれを覚悟した上で、1つの自治体に絞って受験する人より倍の対策が必要になるので早め早めに対策と勉強を始めてほしいと思います。2つの自治体を受験することは不安になる時もありましたが、私にとってはプラスだったと思います。長崎県と神奈川県で対策がほとんど一緒のところもあったので、時間がかかりましたがたくさん対策ができた分、筆記試験や人物試験

での応用力が付き、自信を持って本番に臨むことができました。結果的に自分の可能性を広げることができてよかったです。いずれにせよ、対策には時間を要するのでまずは両自治体の傾向を把握し、早めに対策に取り組んでほしいと思います。

### 3 1次試験

1次試験対策はまず過去問3年分を解いて、次に教職教養の勉強を行いました。そして勉強した成果を発揮する場所としておすすめしたいのが協同出版や東京アカデミーが約2か月おきに実施している公開模試です。1か月後に返却される成績表では合格ランクに加え自分の弱点が細かく記されており、同じ自治体を受ける他の受験者全員の中で今自分がどの位置にいるのかが分かります。私は大目標を採用試験合格、小目標を模試で常にA判定を取り続けることにし、まずはその小目標を達成すべく次の模試までの計画を細かく練り勉強に取り組みました。明確な目標を持って取り組むことで質の高い勉強ができました。一通り参考書や問題集を終えたらある程度力はついていたので、模試の継続受験や他の自治体の過去問を解いて勉強を行いました。科目の勉強は主に過去問を中心に行い、足りない知識は大学受験時に使っていた参考書や単語帳を用いて弱点を補強しました。自治体によっては一次試験で論作文が実施される場所もあると思います。論作文はどれだけ書いて練習したかが全てです。はじめは下手でも、書いていくうちに書き方に慣れるとともに、論作文で出題されるテーマはいくつかのパターンがあることに気が付くと思います。本番までいろいろな種類の論作文を書き、個別相談などで添削をお願いしてみてください。必ず書けるようになります。

### 4 2次試験

2次試験では個人面接、集団討論、模擬授業、実技試験が実施されました。これらは1次試験と違い、自分一人で対策するのは不可能です。そこで私は個別相談で面接練習を重ね、模擬授業や集団討論は教職課程センターの講座に参加して対策しました。個人面接に関しては個別相談での練習は主に1次試験後から開始し、それまでに過去に聞かれた面接の質問に対する答えを箇条書きでノートにまとめました。そうすることで頭の中で自分の考えが事前にまとまり、スムーズに2次試験の対策に移ることができました。英語科で実技試験がある場合は、普段身の回りに英語を話し試験の対策ができる環境があればよいですが、そうでない場合

は自らその環境を求めて対策していくことをお勧めします。私は、英会話教室に通い面接練習を行っていただきました。2次試験は自分をしっかりアピールできなければ突破は困難です。そのためにも、1次試験前ごろから余裕を持って一度自分と向き合い、自分の教師への熱意をどう伝え、そこに自分の経験や長所をどう教師になって生かしていくべきかなど考えをまとめて本番を迎えてほしいと思います。いくら練習しても本番は緊張すると思いますが、緊張しながらも自分を信じて自分の力を十分に発揮できるかは、それまでにどれだけ自分が対策を行ってこられたかだと思います。

## 5 最後に

私は教育実習の際に実習校の校長先生から言われた言葉が心に残っています。それは常に「学び続ける教師」であれという言葉です。私は今年度の教員採用試験で無事に合格することができましたが、本当に頑張らなければいけないのはこれからです。子供、保護者、地域などから多様なニーズを求められる教師という職業において、自分に満足せず学び続ける姿勢を持ち続けることはとても大事だと感じました。これから教師を目指していかれる皆さんもこれからの採用試験の勉強や教育実習などにおいて、学ぶことがたくさんあると思います。ぜひ学び続ける姿勢を忘れず頑張ってください。応援しています。

---

## 教師になるとは

田中 仁

(グローバル教養学部グローバル教養学科4年)

---

この度、千葉県の公立、中・高英語の教員採用試験に合格しました、グローバル教養学部グローバル教養学科の田中仁です。これから教員を目指す人へ教員採用合格の体験談を共有してほしいとお話をいただいた時、なにを話すか迷いました。私の大学生活を振り返ってみると色々なことがありました。その中でも今回は教員を目指す人に知っておいてほしいことが三つあります。それは“心掛け”“勉強”“覚悟”の三つです。

### 教員を目指すに当たって心掛けていたこと

私は教員を目指すに当たって何よりも“生徒のために”を意識して大学生活を送っていました。教員採用試験に合格し、教師になれば1年目も10年目も関係ありません。そこで私は大学生のうちから現場を知っておく必要があると考え、浅草中学校での学習ボランティアや千葉県の教育委員会が勧めている「教職たまごプロジェクト」、年に何度かある学校見学などに参加し教育現場の現状や課題について勉強してきました。また教職課程センターが主催している講座や、外部の現役教員向けの講座やイベントにも参加し様々な考え、教

育法を学ぶことができました。実際に現場を経験することで、将来どのような学級や授業を作っていきたいかのビジョンを持つことができました。明確なビジョンを元に面接では具体的な話をするのが合格につながったと感じています。

さらに私の希望校種は高校だったため様々な進路や職業についての知識が必要だと考えていました。そこで私は大学4年間で様々な業種のアルバイトを行ったり、就職活動をしている学生や卒業生の話を聞いたりしていました。話のレパートリーを増やすことで将来生徒が進路や就職に関して質問してきた際に少なからず何かの話をしあげることができるように心がけていました。大学生活は忙しく、苦しい時もありましたが何事も“生徒のために”と思うことで新しいことに挑戦したり、積極的に知らない人に話しかけたりして教員採用試験を乗り越えることができました。

### 採用試験のためにやってきたこと

採用試験の勉強はどのようにしていたかと聞くと、人はバイトやサークルなどの回数を減らし、予備校や自習室を活用して1日何時間も勉強をしたと言います。決してそれが間違っているとは言いませんし、人それぞれ確立してきた勉強法があるのでこの勉強法が良いとは言いません。もし新しい勉強を試したいと考えているのであれば、一つの例として私の勉強法を試してください。私は大学生になるまでは多くの人のように勉強は長くやるほど良いと考えていました。しかしこの考えで高校受験と大学受験を失敗したので、今回こそは成功したいと考えていました。そこで今まで確立してきた勉強法を変えるという一大決心しました。それは勉強を“量”より“質”に変えることです。具体的には毎日決めた範囲、時間だけ採用試験の勉強をし、残りは自由時間としてアルバイトや講座の参加、趣味などに使っていました。真実を言うと、教員採用試験の勉強時間は長くても1日90分しか行っていませんでした。なぜ90分しか行わなかったかというと、「人間は集中するのに約30分かかり、長くても90分しか保てない」との新聞記事を見かけたからです。そこで私は毎日採用試験の勉強をする90分だけは携帯などの誘惑が机の上にならないようにして勉強しました。短時間しか行わない分、その日やった範囲は必ず覚えることを意識し、効率的に勉強していました。

### 教員採用試験を受けるに当たっての心構え

最後に教員採用試験を受けるに当たっての心構えについてお話したいと思います。多くの人は就活をするのか、教員採用試験を受けるのか、それとも両方をするのかを迷っていると思います。迷った末にどちらかを選ぶこととなりますが、今回の教員採用試験を通し教員採用試験は中途半端な覚悟では突破できないと痛感

しました。私の場合、大学入学前から教員になりたいとの夢があったため就活は考えておらず、迷いはありませんでした。その反面、試験の前や結果待ちの時期は本当に気がおかしくなるぐらい辛かったです。もし合格できなかった場合は私立を受けるか、講師のお話が来ない限り無職ですし、来年は新卒ではなくなるので就職活動は不利になります。また教員採用試験のためのモチベーションをどのように保てば良いのか、もし来年も不合格だったら...と悩み、心が病んでいる時期もありました。教員採用試験を受けて先生になるということは、このような心境に陥ることを覚悟しておく必要があるということです。

皆さんが気になるのは私が実際どのようにこの心境を乗り越えたかだと思います。私が乗り越えた方法は冒頭で話したように何事も「生徒のために」と思うことです。教師になったら生徒の将来について考える必要が出てきます。就職、進学どちらにせよ受験がついてくるので、生徒も受験前や結果待ちの際は私が教員採用試験で陥った心境のようになるはずです。このような心境に陥った生徒への対応の差は「教師自身が経験しているかどうか」と考えることで私はこの時期を乗り越えることができました。すなわち何事も「生徒のために」と思うことで、どんなに苦しい時期もプレッシャーも乗り越えることができたのだと思います。

今回教員採用試験を受けるにあたっての「心掛け」「勉強」「覚悟」について言及しましたが、教師を目指す理由が人それぞれ違うように、これはあくまで私が教員採用試験を通してこれから教員を目指す人に知っておいてほしいと思ったことです。この経験談を通して一人でも多くの「生徒を第一に考えることのできる先生」が法政大学から出てくれると嬉しいです。

---

## 公立校教員になるために

水上 智紀（文学部日本文学科4年）

---

私は、来年度より埼玉県公立中学校で、教員として働かせていただくことになりました。今回は、合格体験談ということで、私が採用試験を通じて感じたことを述べさせていただきます。

### 1. 目標を間違えない

我々の目標は、「生徒に分かりやすい授業を提供すること」や「明るく楽しい学級を作ること」かもしれません。しかし、それは教員になった後の目標です。採用試験に受からなければ、そもそも教員にはなれません。試験までの目標は、「教員採用試験に合格すること」です。目標を間違えると、採用試験には必要のないことまでしてしまいがちです。受験する自治体の選考に「模擬授業はあるのか」「面接に場面指導は含まれるのか」など

を、徹底的に調べ、必要のないことは切り捨てるという覚悟が必要だと思います。

### 2. 筆記試験のために

勉強の仕方は大学受験の勉強同様、人それぞれだと思います。私の場合は、3年の秋頃に参考書を買って、週に3～10時間程度、4年の3月からは月に100時間を目標に勉強しました。これと決めた参考書を一通り眺めた後、問題集を解きました。埼玉県の一般教養の出題範囲には、音楽や美術も含まれ、非常に範囲が広いのです。そのため、「広く浅く」勉強することを意識しました。一方で、教職教養は、説明できないワードが無いくらい細かく、参考書3冊、問題集4冊を何周もしました。問題集でわからなかったものは参考書で調べ、それでも足りない情報は他の参考書やネットで調べ、メインの参考書に書き込み覚えるということを繰り返しました。また、教育に関するニュースは日々増えています。そのため、ネットで情報を得ることも大切です。直前の1ヶ月では、全国の過去問[教職教養]1年分、埼玉県と栃木県の過去問[教職一般教養]それぞれ10年分程度をひたすら演習しました。筆記試験の出題傾向は、突然変わるかもしれません。受験する自治体に縛られず、とにかく多くの問題に触れることが高得点につながると思います。

また、教育実習期間は忙しいです。しかし、時間を作ろうと思えば作れます。私は、毎日1時間以上はやることと決め、実習中も勉強を続けました。自分に必要な内容・時間を考え、計画的に勉強することが大切です。

### 3. 面接、討論のために

過去の面接での質問と、それに対する自分の答えをノートにまとめた「面接ノート」を作りました。これは面接準備の中で2番目に効果があったと感じています。1番効果を感じたのは、教職課程センター企画の、2次試験対策講座での模擬面接です。実際に面接官の経験のある方が、本番同様に面接をしてくださいました。そこで自分に足りないものに気づくことができました。また、本番同様の緊張を味わえたことで、採用試験本番の面接では緊張せず、全力が出せました。

2次試験を実際に経験し、人とのコミュニケーションがとても大切だと感じました。勉強ばかりしていると、どうしても雰囲気が落ち着き、悪く言えば「暗くなる」ように思われます。どの自治体を受けるにも、面接と集団討論は避けられません。いくら練習をしても、本番では普段の雰囲気が出てしまうと思います。「面接の時はとにかく明るく」などと参考書等には書いてありますが、「普段から明るく」というのを心がける必要があると感じました。そのためにも、やはり友人とのコミュニケーションは維持すべきだと思います。教採を受ける仲間が周囲にいなければ、教職課程センターの企

画に参加することをお勧めします。

### 終わりに

今の皆さんの目標は、教員採用試験で合格することです。自分の受験する自治体の選考にないのであれば、模擬授業や場面指導の練習はしなくとも良いと思います。確実に自分に必要なことを計画的にしましょう。

また、2次試験の準備を早めにするのは重要だと思います。しかし、1次試験を通過できなければ2次試験は受けられません。そのため、「1次の勉強よりも2次の準備を優先する」ことはお勧めしません。1次の勉強をしていて飽きたとき、余裕のあるときに、2次試験の準備をしてみてください。

私が合格できたのは、足りない部分を指導員の笠谷先生に鍛えていただいたおかげです。また、センター職員の方々もサポートしてくださいました。早い段階で、今の自分の能力と、採用試験合格までのギャップを見極め、助けてくれる人には甘え助けてもらうことをお勧めします。ぜひ、教職課程センターを活用してください。

---

## 母校で働くには

福島 謙晶（人文科学研究科日本文学専攻2年）

---

私はもともと公立の学校よりも私学の教員になりたいという希望があったため、そのような方針で就職活動を行ってきました。結果的には一番の希望であった母校の内定をいただき、常勤講師として来年度から務めさせていただくことになりました。ここでは、私の体験談として、大学院へ進学したことで就職活動にどのような影響があったか、私立の採用試験について、母校に採用するために心がけたこと、の三点について述べさせていただきます。

まず、私が大学院へ進学した理由は、学部では時間的に着手できない本格的な研究を二年間かけて体験し、学術研究のメソッドを学びたいと思ったからです。文系大学院は理系と比べ、あまり社会的に認知されている進路ではないので、やりきる意志がないとあらゆる面で困難に見舞われます。そのため、大学院進学はある程度強い意志を持って決めた方がいいと思います。

大学院進学による就職活動への影響は私立採用においては少なからずあったといえます。しかし、二年間大学院に通うことと私立校の非常勤を二年ほど行って経験を積むことでは、大学卒業後二年の時点では就職活動の有利不利という点ではあまり差がつかないと思います。ただ、有名大学付属校の募集などにおいては修士卒を最低要件としている場合も多くあり、そういった就職先を希望する場合は大学院へ進学する必要が

あります。しかし、そういった学校では新卒採用という話はあまり聞かないので、将来的に転職活動の時の武器になると思えばいいと思います。また、そういった修士を最低要件としている学校の中には教職大学院を修士として扱ってくれないケースがありますので注意しましょう。ちなみに、学部卒の新卒の場合、専任あるいは専任登用を前提とした常勤講師での採用はかなり狭き門になります。よく「私立教員はまずは非常勤から」と言われるのはこのためです。

次に私立の採用試験についてですが、学校によって異なります。必ずあるのは書類審査です。これは、試験の受験先の学校のHPを見て、教育方針や校訓、学校の沿革などを熟読した上で書けば問題ありません。次に大体の学校で筆記試験はありますが、レベルはそれぞれです。その学校のHPにある進学実績を見て、その学校の生徒が目標とする大学のレベルを予測し、その大学の過去問を使って対策をしました。面接や模擬授業は書類審査と同じように学校の方針に沿った形で行いましょう。基本的なことは公立校と一緒です。

そして、母校の内定を取るために努力したことでありますが、まず教育実習でその学校に行くことは最低条件です。そして、とにかく実習を頑張ります。実はこれが一番大事です。次に、文化祭の手伝いでも何でもいいので、ボランティアを申し出る、など積極的なアピールを行い、よく先生方とコミュニケーションをとることが大事です。こういった努力を積み重ね、あとは運が味方をすれば良いタイミングで教員募集の求人が出るので応募します。母校に対してアプローチをかけることはできますが、最後はタイミングです。私立の教員採用はなかなか狙って特定の学校の試験を受けることはできないのが現実です。

以上が私の就職活動の体験談です。受かる、受からないとは別として、私立校を受けると、公務員系ではない一般的な就職活動の流れも知ることができるため、社会に出るためのマナーが身につきます。これは実はすごく重要なことで、公務員系の試験のみで就職した人は就職してから学ばなければなりませんし、場合によっては全くやったことのない人もいます。公務員の社会性が希薄だと言われる理由の一つでしょう。

あと大学院進学ですが、教師として学問を糧に仕事をするのであれば、学位は絶対に武器になるものと思います。特に私立教員の場合には大学院出身者の割合もある程度高く、これからもっと高くなっていくと予想する人もいます。「もっと学びたい」というのも大事なモチベーションの一つですが、修士からは学位を取得してそれをどのように生かすかということもよく考えた上で進学をするようにしましょう。

---

## 特別支援学校教員を目指して

小泉 杏菜（理工学部応用情報工学科 4 年）

---

私は今年の 4 月から東京都で特別支援学校（中高数学）の教員として働きます。

### 1 特別支援学校の教員を目指すにあたって

大学に入学したときは、まさか自分が特別支援学校の教員を目指すようになるとは思いませんでした。というのも、私は元々、教員になるつもりはなく、教員免許だけ取ればいいと、なんとなく教職課程を履修し始めたからです。

そんな私が特別支援学校の教員を目指そうと思ったきっかけは、教職課程の一環である介護等体験です。その特別支援学校での 2 日間の実習で、私は初めて障がいのある生徒と関わりました。最初はどうか関わっていかかわからず、不安でいっぱいでした。実習を行う前は、私は「障がいのある」生徒として接しようと思っていました。しかし、それは大きな間違いでした。障がいの有無に関わらず、相手の立場に立って、接すればいいということが分かりました。そして実際に生徒と関わっていくなかで、障がいのある生徒たちは純粋で温かい心をもっていることを知りました。

そして、もっと障がいのある子どもたちのことを知りたい、関わりたいという思いが強くなり、放課後等デイサービスでアルバイトを始めました。放課後等デイサービスとは、障がいのある子どもたちが放課後に通う学童のような場所です。そこで、改めて障がいのある子どもたちと接するのが楽しい、この子たちがもっと生きやすくなるようにサポートしていきたいという思いが強くなりました。そして私は特別支援学校の教員を目指す決意をしました。

### 2 東京都の教員採用試験について

東京都の特別支援学校の採用試験は、私のように特別支援学校の教員免許がなくても受けることができます。今回は 2 次試験を中心にお話ししたいと思います。

2 次試験は、集団面接と個人面接から成ります。私は 3 年生の春休みから 4 月まで予備校に通っていました。そこで出会った、私と同じように特別支援学校の教員を目指す仲間たちと、繰り返し 2 次試験対策をしました。

集団討論の練習に関しては、面接官役を必ず付けるようにしていました。出題されたテーマから脱線していても、討論しながらではなかなか気付くことができません。面接官は討論全体の流れが分かり、一番勉強になります。私は集団討論の練習に 30 回以上は取り組みました。何度も練習をして自分に自信をつけることで、本番でも落ち着いて発言することができました。

個人面接の練習も何度も繰り返し行いました。単元指導計画などは、実際に現場で経験している方にアドバイスをいただき、実態に即した授業となるように心がけました。

2 次試験対策をしていて気が付いたのは、周りの受験生は、特別支援教育を専門的に学んでいる大学生や、既に実際に現場で教員として働いている方が大半を占めるということです。そんな中で、学校現場での経験も、知識もない私が合格するためには、とにかく教員になりたいという熱意、そして自分自身の教育観がぶれないことが一番大切だと思いました。これは、教員採用試験を受験する人全員に共通していえることであると思います。

### 3 最後に

小中学校の教員を目指す方も、現在では特別支援教育を必要とする児童・生徒は、以前に比べてとても多くなっています。教員を志すすべての人に、特別支援教育を必要とする児童・生徒のことをもっと知ってもらいたいと強く願います。

私の合格は、共に練習した仲間がいなければ、絶対になかったと思います。みなさんも仲間と助け合いながら、夢の実現に向け、頑張ってください。応援しています。

---

## 教員採用試験に向けた勉強方法など

岡本 大志（理工学部創生科学科 4 年）

---

私は、岐阜県の中学校数学の教員採用選考に合格しました。事情があつて岐阜県には行かないことになりましたが、勉強方法など後輩の皆さんに参考にしていただければと思い、体験記を書かせていただきます。よろしくお祈りします。

### ① 1 次試験に向けて

私は 3 つの自治体の試験を受験しました。それゆえ、教職教養・一般教養・専門の数学の 3 つを幅広く勉強しました。教職教養は、一般的な参考書（「教職教養らくらくマスター」：実務教育出版）や「教員養成セミナー」で勉強をしていました。教職教養らくらくマスターは重要度が A～C の三段階になっており、頻出自治体を記載してくれているので、重要な A の部分や自分の受験自治体のページを重点的に読んで、教職教養の全体像を掴むようにしていました。「教員養成セミナー」は、教職教養の中でも特に頻出な部分（教育法規やいじめなどの教育原理）を載せてくれていたので、的を絞って勉強することができました。一般教養は、塾で講師をしているので、国社数理英 5 教科は生徒と一緒に勉強しました（笑）。それで理科や社会は結構できるようになりました。音楽や美術などの教科は出題範囲が幅広

く、自分には無理だと思ったので捨ててしまいました。合格に必要な点数から逆算することが大切だと思います。専門教養の数学は、協同出版の参考書の問題を解いたり、実際に志望自治体の過去問を解いたりを中心に行っていました。志望自治体によって出題形式が大きく異なっている場合もあるので形式が似ている問題を何度も解くことが大切だと思います。

## ② 2次試験に向けて

面接に必要な知識は、「教員養成セミナー」で入っていました。重要統計も多く載っているので、役立つと思います。面接練習は、教職課程センターで開催される講座に参加し、練習を行いました。友達の練習している姿も見ることができたので、自分が練習している時に気づけなかった視点に気づくことができました。論文は相談員の田神先生に何度も添削して頂きました。論文は何度も添削してもらい正しい形で書けるようにすることが大切だと思います。また、論文においても、面接においても実践経験があるに越したことはないと思うので、学習ボランティアなどをやればプラスになると思います。自分は中学生に部活動を教えていました。

## ③ 複数自治体の併願について

私は、日程の異なっている3自治体を受験しました。少しでも合格の可能性を広げたいのであれば、受験してみるのも良いと思います。私は、私立の受験を考えていなかったのですが、試験機会を増やすために複数の自治体を受験しました。併願の自治体を決めるときのポイントは、試験傾向が大きく変わらないことと、採用枠の大きさの2点だと思います。公立の教員にこだわっている人は複数の自治体を受験してみるのも良いと思います。

## ④ 終わりに

教員採用試験で一番大切なことは、勉強のためのモチベーションを保つことだと思います。自分も何度もやる気を失い、グータラな生活をしてしまいました。しかし、教職課程センターに遊びに行ったり、友人と一緒に勉強したり、外部模試に参加したりして、頑張っている人の姿をみて勉強を続けることができました。そのおかげで、受験した3自治体とも1次試験は突破することができました。2次試験は運の要素もあると思いますが、筆記に関しては勉強した量×質がすべてだと思います。合格へのモチベーションを保って頑張りたいです。自分も地元県の合格に向けて来年度も皆さんと一緒に頑張ろうと思います。

---

## 合格が終わりではなく、ここからがはじまり

山崎 夏歩（理工学部創生科学科4年）

---

私の夢は、生徒が理科の楽しさを知り、生き生きと学

び、日々の学校生活を充実して過ごすことです。そのため、私は公立中学校の理科教員になり、教育公務員になることを目標として、法政大学理工学部創生科学科に入学しました。大学へ進学し、本格的に教職課程の勉強をしていくにつれて、小学生の頃からぼんやりと考えていた教員になる夢は、私の中でどうしても叶えたい夢へとなくなっていきました。その結果、教員採用試験に合格することが必要不可欠となり、在学中の合格を目標としました。今では、教職課程センターの先生方をはじめ、法政大学の先生方、教職担当の学務課の方々、卒業された先輩方、また、教員採用試験を受ける仲間たちがいてくれたからこそ、在学中に合格することができたのだと実感しています。たくさんの人に恵まれて、私はこれ以上ない幸せ者です。

そして、私は今年の春から茨城県の公立中学校の理科の教員として働きます。これから教員採用試験の試験勉強開始から合格までの過程について書きたいと思います。この文章が、教員を目指す方にとって少しでも支えになれば嬉しいです。

### 1. 受験勉強開始

本格的に受験勉強を始めたのは3年生の12月。教育実習事前指導にて、先輩方の合格体験談を聞いて、教員採用試験に向けて一直線になりました。正直、周りの学生よりも受験勉強のスタートは遅かったのですが、短期集中で質と量の両方を重点に置きました。もし、受験まで時間が足りないと不安を感じている人がいたら、どうか自分を信じて、残された時間の中で自分が精一杯できることを挑戦してください。受験勉強に必要なのは、「自分を認めること」と「自分を信じること」であると私は思います。

### 2. 受験内容

私の受けた自治体の試験内容は、一次試験は、教職教養、一般教養と専門教養で構成されているマーク式の筆記試験であり、二次試験は、小論文、集団討論、模擬授業ありの個人面接でした。一次試験は、おおかた独学で挑み、二次試験への切符をつかみました。勉強の甲斐あって、一次試験合格者の中でも、上位20%に位置することができました。ここで、私が当時、参考書として使っていた教材を少し紹介したいと思います。①これだけは覚える教員採用試験教職教養「成美堂出版」(教職教養)。②マーク式基礎問題集「河合出版」(専門教養)。③センター試験0からはじめて100までねらえるシリーズ改訂版物理基礎(生物学基礎・化学基礎・地学基礎)の点数が面白いほどとれる本「蜷川雅晴」(専門教養)。④教員採用試験過去問シリーズ「協同教育研究会編」。いずれの参考書も、独学する点においておすすめです。ただし、浅く広く勉強したい人に推奨します。また、一般教養につきましては、とても幅が広いため、

焦点を絞って勉強することを提案します。私は、国語や社会が苦手だったため、この2教科を重点的に勉強しました。勉強方法としては、スマートフォンの無料アプリを利用して、国語に関しては、漢字・ことわざ・四字熟語・文学史を、社会に関しては、中学卒業レベルまでの地歴・公民を学習しました。さらに、私の自治体では、茨城県の郷土についても問題が出題されるため、インターネット公開している郷土検定というサイトを利用して、特色をおさえました。その甲斐あって、文学史、地歴・公民、郷土において、試験当日は全問正解することができました。二次試験は、小金井キャンパス教職課程センターのお世話になり、何度も何度も練習を重ねました。先生方のご助言、ご指導のおかげで、試験当日は、自分の力を最大限に発揮することができました。

### 3. 受験後

10月になり、長き戦いも終止符が打たれ、私は無事試験に合格することができ、夢に一步近づくことができました。受験を通じて、たくさんの人と出会い、たくさんの人に救われました。この合格は、22年間生きてきた中で、最も幸福を感じた瞬間でした。しかし、合格は、一つの通過点にしかすぎず、ここからが夢へのはじまりです。これからは、自分の夢へと向かって、最善の努力を尽くす決意であります。どうか、教員を目指す後輩のみなさんが、最善の力を発揮できますよう、心から応援しています。いつか、同じ職業として働くことができることを楽しみにしています。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

---

## 二つの自治体の受験体験から学んだこと

酒井 真由子（生命科学部生命機能学科4年）

---

私は、東京都中高共通理科（生物）で合格しました。私が受験した自治体は、埼玉県と東京都です。自分の実力不足で埼玉県は不合格でした。二つの自治体の受験から私自身が学び、感じたことを書きます。

### 1. 東京都

一般受験しました。教職課程センターに通い始めたのは、3年生の4月で、このころから小論文（1000字）を書き始めました。専門教養と教職教養は3年の後期から始めました。専門教養は大学受験の時に使っていたテキストや、過去問を用いて勉強しました。一緒に受験する仲間とわからないところを教え合っていたことが、結果としてよかったのではないかなと思います。教職教養は、過去問で勉強しました。教育原理と教育法規を重点的に行いました。

大学受験でも同様のことが言われていますが、受験会場には様々な人がいます。他の受験者に流されないよう、自分のことに集中しました。偶然、同じ受験会場

に、小金井からの受験者が私の他に5名いて、試験開始前に少し話をしたことは、私の中では緊張をほぐすよいきっかけとなりました。

二次試験対策としては、教職課程センターで行われていた、個人面接練習・集団討論練習に参加しました。また、1年生のころから、学習支援を行っている学校の校長先生や、副校長先生、新任の先生にも練習にお付き合いいただきました。アドバイスいただいた中から、今、現場で求められているのはどのような教員なのかを分析しました。

集団討論も個人面接も、手ごたえはありました。仲間たちとともに強い気持ちをもって最後まで試験に臨めたことが結果につながったと考えています。

### 2. 埼玉県

大学推薦を使って受験しました。大学推薦を考え始めたのは3年の後期で、周りの人が就職活動を本格的にスタートさせていた時期でした。GPAがそこまでよかつたわけではないのですが、なんとか大学推薦をいただくことができました。このことで、埼玉県の受験は二次試験のみとなりました。埼玉県二次試験の内容は、個人面接（場面指導含む）・小論文（800字）・実技（実験）集団討論でした。小論文・面接・集団討論練習は、東京と同様の対策を取りました。実技は、学習支援を行っている学校の理科室をお借りして、出題されるところを確認しました。

埼玉県は二次試験が3日間に分かれて上記の順番に行われました。個人面接・小論文までは手ごたえがあったのですが、実験で失敗してしまいました。そこで、私のメンタルがもたなくなり、集団討論まで2週間あったにも関わらず、引きずってしまい、結果として大学推薦をいただいたにも関わらず、合格することができませんでした。埼玉県は点数開示ができます。自分で感じていた出来と点数が比例していました。気持ちの切り替えや合格するという強い気持ちを持つことは重要だと思います。

### 3. 最後に

何回か強調してきましたが、仲間の存在は大きいです。就職活動で内定をもらう人が多くなる6月以降から試験が終わるまでの期間は、何回も投げ出したくなりました。来年度、自分の進路が決まっていない不安と、それをすぐに解消するためのすべがないもどかしさでいっぱいでした。でも教採と一緒に受ける人にはその気持ちを共有できます。一人で抱え込まずに、信頼できる仲間と共に、採用試験を乗り越えていってください。応援しています。短いですが、皆様の参考になれば幸いです。

---

## 私立学校教員の採用について

新井 七菜子

(理工学研究科システム理工学専攻修士課程2年)

---

私は今年の春から埼玉県私立開智未来中学高等学校で理科常勤講師として働きます。情報の少ない私立教員の就活について、少しでも皆さんの参考になる点があれば幸いです。

私は修士1年の4月から母校で週2回非常勤講師として働いていました。学部時代から教員の道は考えていましたが、一般企業とも迷っており、大学院に通いながら非常勤講師をすることにしました。研究という形で深い勉強をしつつ具体的な教員の仕事も知ることができるため、機会に恵まれればこのような選択も考えてみることをお勧めします。

はじめに就活のスケジュールと活用したシステムについてです。私は修士2年の4月から9月まで活動していました。私立では最も早い学校が4月頃に募集を開始し、おそらく12月、次の年の1月位まで募集があります。基本的には自分で募集を探して各学校に書類を提出します。また、私は各学校への応募に加えて4月にビックサイトで行われた教員.jpという会社の私立学校合同説明会を利用しました。1日で多くの学校の説明を聞き、その場で書類応募や1次選考を受けることができます。内定をいただいた学校もこの説明会から応募しました。この他にも自分の情報を登録しておく条件に合う学校の募集を紹介してもらえる、または学校から声をかけてもらえるような制度があります。

(E-Staff、一般財団法人東京私立中学高等学校協会履歴書委託制度、キリスト教学校教育同盟 等)

次に私が体験した選考の内容についてです。私立の選考の流れは、基本的には書類選考、筆記試験、面接、グループディスカッション、模擬授業です。書類は教育関連の作文や独自のエントリーシート、筆記は募集科目に加えて教科、教職教養がある場合もありました。グループディスカッション、模擬授業はない学校もあります。とにかく学校により様々で募集要項が出るまで内容は分かりません。私は筆記対策については東京都の問題集を中途半端にやるだけになってしまいました。他については自分の考えを分かりやすく人に伝える、素で臨む、模擬授業は指導案をきちんと作り入念に準備することが大切だと思います。

最後に私立教員就活の大変だった点と良かった点、反省点についてです。大変だったのは、選考内容が学校ごとに異なり情報もないので対策がしにくく、選考を受けるのに時間も取られるところです。また、募集や内定の時期、希望科目の募集がその年どれだけあるかが読めない、常勤講師、非常勤講師等の役職や福利厚生が

不明瞭な場合がある、各学校1人しか受からない点も挙げられます。私立学校では始めの何年かは常勤、そのあと問題がなければ専任といったケースも多いため、この点は特に選考を受ける前に確認した方が良いです。逆に良かった点は、筆記試験に失敗してもチャンスがある、人柄を見てくれる傾向が強いところです。実は内定をいただいた学校も筆記はボロボロでした。校風や考え方が合えばあっさり内定することもあるのではないかと思います。また、何校落ちてでも体力と精神力が持てばいくつでも受けられるのもメリットです。粘り強く受け続けられれば相性の良い学校がとってくれる可能性が高く、その後もずっとその学校で働くことができます。

私の就活を通しての反省点は、筆記対策と就活の方針についてです。私立を第一志望としており、公立は受けただけという形になってしまい対策も不十分でした。このことが私立の筆記で落ちる原因にもなり可能性を狭めたと思います。難しい判断ではありますが、まず公立私立どちらをメインにするのか、私立の中でも志望度の高い学校だけ出すのかといった方針は本格的に就活が始まる前に決め、ぶれずに貫くと良いと思います。

自分の直観と考えを信じて、気負いすぎず頑張ってください。

---

## 効率の良さ！そして友達との支え合い！

長島 憲宏 (理工学部電気電子工学科卒業生)

---

私は、茨城県の中学校教員(数学)に合格しました。実は、去年にも教員採用試験を受験しています。結果は2次試験で不合格となり、今は茨城県の公立中学校で非常勤講師をしています。ここでは、1年目、2年目で教員採用試験に向けて取り組んだことや受験を行ったうえで大切だと感じたことを書いていきたいと思います。

### 1. 試験に合格するうえで大切なこと

#### (1) 1次試験

私が教員採用試験を受けた際、一番大切だと感じたことは「効率」です。私は、教員採用試験を受けようと決意したものの、結局勉強を始めたのは4年生の4月です。この時期から勉強を始めると無駄な勉強をしている時間は全くありません。そこで私は一番初めに何をしたかという、過去問を徹底的に研究しました。具体的には8年分の過去問をみて、毎年出題されている分野、定期的に出題されている分野、全く出題されていない分野の3つに分類しました。また、その中でも今までの自分の力で対応できる分野と、新しい知識が必要なため勉強が必要な分野を設定しました。まず、茨城の教員採用試験では、教職教養、一般教養、そして専門

科目（数学）が1次試験の科目となっています。

教職教養に関しては、全く未知なものしかなかったので最初の2か月は教職教養の勉強に時間を使いました。専門科目、一般教養に関しては、ここでも覚えている分野、覚えていない分野の2つに分類をしてから勉強をしました。自分たちが高校で習ったことのない分野なども出題されることがわかったのでチャートなども用いて勉強しました。

少し、具体的な話が長くなってしまいましたが、まとめると過去問をできるだけ細かく研究し、自分のできない分野を見極め、勉強を進めていくことが合格への第一歩だと思います。何から勉強をすればよいのか迷っている方、是非過去問研究をお勧めします。

## (2) 2次試験

次に2次試験について少し話をしていきたいと思えます。2次試験を受ける際大切だと感じたことは、「1人では勉強しない」ということです。茨城県の2次試験では、集団討論、個人面接（場面指導含む）、小論文の3つの試験があります。正直、これらを1人で勉強するのは効率が悪いと思えます。また、集団討論、個人面接に関しては、自分ではない客観的な意見が一番大切です。集団討論、個人面接に関しては、教職課程センターの先生の意見を参考にしながら、模擬面接などの練習を行いました。また、友達と面接者などを交互に行いながら、お互いに意見をいっあうといった勉強をしました。そして、私は、小論文が一番苦手だったので教職課程センターの先生の力をお借りして勉強を進めました。先生に1か月間、自分が書いた小論文を添削していただき、ようやく形にすることができました。小論文は書いた量がものをいうと思えます。ですので、小論文が苦手な方は、「何回も書く」を意識して勉強してください。このように2次試験は、1人で勉強することが難しいこともあると思うので、是非、学校の先生や友達と協力して勉強をしていくことをお勧めします。

## 2. 仲間との支え合い

教員採用試験に合格するまでは正直辛いときが何度もありました。周りの友達は、自分たちが受験する前に内定をもらい、遊んでいました。そのような時自分を支えてくれたのは、共に教員を志す仲間でした。辛いときに互いに励まし合い、勉強や面接練習を繰り返していました。このような支え合いがあったからこそ、私は合格できたのだと思えます。

具体的な勉強の仕方などを書いていきましたが1番大切なことは「最後まで諦めないこと」だと思います。是非、今後受験される皆さんは、必ず夢は叶うと信じ最後まで諦めず頑張ってください。応援しています。

## 教員採用試験を終えて

加藤木 美希（理工学部経営システム工学科卒業生）

東京都中高共通（数学）で採用内定をいただきました。自分の準備内容と当日の様子をお伝えできればと思います。

### 1) 一次試験対策と当日の様子

<論文> 前年の11月より別の団体で開始。2週間に1回過去問をワードに打ち込み、メンバーで添削しあう形式でした。翌年1月ごろから、手書きで書くとともに、時間を計測し始めました。論文の構成は、田神先生と同じです。4月以降は毎週1本をノルマとし、他の人（友人・先生）に見てもらいました。

<専門教養> 前年の8月に過去問を数年分解き、傾向を把握し8月までの大体の計画を立てました。点数が半分いかなかった人は、この際に教科書に戻り、基礎を徹底することを忘れないでください。教科書の内容を思い出したら、青チャートで勉強を進めました。

<教職教養> 論文の準備と同じタイミングで教職教養の対策本を買いました。2月までには、本の赤字は覚えるようにし、4月以降は教職対策の雑誌に掲載されている予想問題を利用し、苦手な箇所を克服するように努めていました。

<その他> 都立高校でのアルバイトを始めました。これが自分にはいい経験となりました。理由は4つです。① 職員室や生徒の普段の様子を知ることができる、② 教育に関する現実的な自分の考えをもつことができる、③ 論文や面接で説得力のある受け答えができる、④ 採用後教員としての在り方を考えることができる。塾講師している方も多いと思えますが、学校に入ると、塾と学校の様子を比較できて面白いと思えます！

<当日の様子> 大学受験をイメージすれば大丈夫です。

### 2) 二次試験対策と当日の様子

<集団討論> 一次対策と並行し、4月頃から別の団体で2週間に1回の頻度で開始。討論の観点としては、話す内容が学校現場と大きく乖離していないか、全員に話を振っているかを見てもらっていました。また一次試験後は、自分の意見を1分半で発表する練習を家でしていました。

<個人面接> 小金井キャンパス・市ヶ谷キャンパス・都立高校のアルバイト先で面接対策に参加。初めての就活の時は対策を怠っていた反省を生かし、数をこなすことで慣れることに焦点を当てました。

<当日の様子> 控え室到着時から筆記用具を含め、物を出すことを禁止されます。東京都は話せる雰囲気は皆無です。一部の時間を除いて、筆記用具含めて物を取り出すこと禁止、私語禁止、姿勢を崩すわけにもいか

ず、良い姿勢で座って待つのみなのでかなり辛いです。

(笑) 集団討論は、面接官 3 名、受験者 4,5 名 (A~E さん) で行われます。個人面接は、集団討論と同じ面接官が行います。つまり、E さんは 1 時間半~2 時間座って待機です。再度お伝えすると、待機時間は物を取り出すことは禁止、かつ私語厳禁。(笑) 教採で見られているのは、知識があることは大前提、教員人生を見越し、通過点として準備しているか、と感じました。教採 ≠ ゴールです!

### 3) 合格発表後の流れ

合格発表が 10 月中旬、必要書類の説明会が 10 月末、初回書類提出が 12 月初頭、採用前書類提出が 3 月にあります。

以上私の経験を述べさせていただきました。みなさんのお役に立てれば幸いです。

---

## 「努力は必ず自信になる！」

渡辺 千春 (社会学部社会学科 4 年)

---

私は、栃木県中学校・社会科の教員採用試験を受験し、合格を頂くことができました。地元である栃木県に戻りたいという気持ちが強く、栃木県に絞って採用試験対策をしました。同じ自治体を受ける人が少なく、栃木県の過去のデータを探ることから始めました。自分との闘いに負けてしまいそうになる時もありましたが、教職課程センターの先生方や両親、友人に支えられ、最後まであきらめずに取り組むことができました。心から感謝しています。採用試験の勉強をしていて、不安になる時があると思います。私がどう不安と向き合い、乗り越えてきたのかを述べていきたいと思います。

#### ① 勉強開始時期

私は、大学 3 年生の秋ごろから教職課程センターでの勉強会をきっかけに開始しました。最初は、勉強が続かなくアルバイトもしていたため、週末に 3 時間ほど勉強をしました。本格的に取り組み始めたのは、大学 3 年の 3 月頃でした。集中力が続かず、1 日 5.6 時間を目安にしていました。本当に合格することができるのか半信半疑の状態、就職活動をしている友人が内定をもらう時期でもあったため、精神的にとってもつらかったです。

#### ② 1 次試験について

栃木県では、一般教養・教職教養、専門科目、集団面接がありました。私は、まず栃木県の過去問を解き、勉強開始時点での実力を確認しました。あまりにも解けず、7.8 割をとることができるのか不安になったことはよく覚えています。また、過去問から記述問題が多いという特徴を捉えることができました。専門科目の勉強法は、「合格者の話を聞く会」に参加し、そこで教えて

頂いた高校受験用のテキストを 1 冊取り組み、基礎固めを行いました。その問題集を完璧にした後に教員採用試験専門の中学社会の問題集に取り組みました。最後に、国公立 2 次試験対策の記述問題集とセンター対策の地理の問題集を解きました。その他は、模試を受け、見直すということを繰り返し行いました。

一般教養・教職教養は、マーク式であることや重視する割合が低かったこと、過去問から同じ問題が出題されていることから、問題集 4 冊に取り組み、過去問約 10 年分を繰り返し解きました。教職教養は、週に 2 回ほど予備校に通い、しっかり理解するまで覚えました。

栃木県は、専門科目の点数が上位 3 割という条件があったため、専門科目に多くの時間を費やしました。1 か月までに終わらせるという目標では、終わらないことに不安を感じたため、1 日ずつ目標を作り、達成していくことを続けました。どちらの勉強も 1 冊を完璧にしてから次の問題集に取り組むようにしていました。

集団面接では、過去問から自分なりの回答を作り、教職課程センターの先生に面接官になっていただき、模擬面接を繰り返し行いました。笑顔と声を張ることを大切にしていました。

#### ③ 2 次試験について

2 次試験では、論作文、集団討論、個人面接がありました。論作文は、1 次試験前までは 1 週間に 1 つのペースで、1 次試験終了後は 1 日 1 つを目標に書きました。たくさんの先生方に添削して頂き、論作文を書くコツがわかるようになりました。集団討論では、様々な人と協力し、何度も行いました。同じく教員を目指す友達と自分では判断に迷う問題を話し合うことを通して新たな考えが見つかることが多くありました。また、私は、教育委員会の HP などから情報を面接で取り入れるようにしていました。個人面接は、2 次試験の中でもっとも重要視していました。第 1 印象で決まるというお話を聞いたので、明るく大きな声で話すことや「目を合わせることを大切にしていました。生徒と関わる中で大切にすることを面接でも意識してみてください。

#### ④ 最後に

教員採用試験に合格することは難しく、教員になりたいという思いがあっても迷う学生が多いと思います。私も、将来のことを考えて不安や迷いを抱える時がありました。しかし、教員という職業にしか感じることでできないやりがいや魅力があると思い、教員になることを決意しました。採用試験当日となって後悔しないように勉強に取り組んでください。やはり、最後は努力したことが自分の自信に変わると思います。受かる自信がないなど不安になる時こそ、今までの自分を振り返りながら、最後まであきらめずに頑張ってください。

## 「既卒社会人だけど一般受験で一発合格！」

石川 卓（社会学部社会学科科目等履修生）

私は社会科教員を志望し、東京都の中高共通（地理歴史）に合格しました。中高共通（地理歴史）における倍率は 7.3 倍ということで、例年に比べ倍率が下がったとは言え、狭き門であったと思います。今回の合格は教職課程センターの先生方からの支援がなければ成し遂げられなかったものです。本当にありがとうございます。また、これから東京都の受験を考えている皆さんに少しでも役に立つことを伝えられればと思います。

### 1. 勉強時期について

2015 年に大学を卒業し、民間企業勤務を経た後、2017 年から科目履修生として教員免許の取得に向けて動き始めました。最初は、「転勤が嫌」「世界史を教えた」という希望が強くあったので、公立の受験は考えておらず、私立一本で教師の道を目指していました。しかし、教職課程センターで相談したところ「公立も受けてみたら？」というアドバイスを頂き、それから私学適性の勉強にもなるし、少しずつ勉強するかという程度の気持ちで 2017 年の 11 月頃から勉強を始めました。

### 2. 1 次試験について（専門教養：100 点 教職教養：100 点 論文：100 点）

東京都は中高共通の試験のため、専門科目は世界史・日本史・地理・政経を勉強しなければなりません。広く浅くやらなければならないと考えながら、1 カ月を悠々自適に過ごして、12 月ごろから専門科目の勉強を始めました。しかし、私学適性検査が頭の片隅にあったので、世界史：日本史：地理：政経の比率は 8：1：1：0 で進めていました。地理は浪人時代にお世話になっていた予備校に行き、毎月ビール 1 ケースで教えてもらっていましたが、それ以外は全く勉強しませんでした。論文試験については、教職課程センターの対策講座に通いながら勉強していましたが、教職教養は教育実習の終わった翌年 6 月半ば以降からスタートして、過去問を解きながらひたすら暗記しました。

結果、私が一次試験で取った点数は専門教養：61 点 教職教養：41 点でした。この点数を見て、どうして合格者に名を連ねているのか自分でもわかりませんが、どうやら論文がよかったみたいです。ただ、点数が公表されないので真相は闇の中です。

### 3. 2 次試験について

当然、自己採点の点数を見て、合格を諦めた私は、まあ、運動でもして気を紛らわそうと、母校の剣道部に顔を出しながら、一応、教職課程センターの二次対策講座（グループ討論・個人面接対策）にも顔を出すなど、7 月～合格発表までは中途半端な姿勢で過ごしていました。ところが、一次試験の合格通知が届いたので、これ

は対策しなきゃいけないなと思って、面接カードは、教職課程センターや友人・家族などからのアドバイスを取り入れてブラッシュアップしながら急いで作成しました。単元指導計画については、その辺の都立高校の年間指導計画をネットで探して、それをベースに作成しました。内容は自分が教師になったらやってみたいことを中心に結構山盛りになっていったと思います。

二次試験当日、試験場に余裕を持って到着するつもりが結構ギリギリになってしまい、走って試験会場まで向かいました。息を切らして面接票を取り出すと、なんと、取得予定免許の欄が空欄になっていました。担当者に追記していいかと聞いたら「認められない」と却下され、「これだから役所は嫌いなんだよ…」と頭の中で文句を言いながら、まあ、どうせ落ちるなら面接練習だと思って気楽にやろうという気持ちになって少し余裕ができました。

グループ討論では、あんまり出しゃばると落ちるということを聞いていましたが、周りは結構大人しそうな人が多かったので、自分が率先して議論を引っ張りました。ただ、周りに対して常に合意を得て話を進めるというスタンスは崩しませんでした。この辺りは会社員生活をしてきたことが役に立ったと思いました。

個人面接では、志望動機を中心に掘り下げられましたが、身振り手振りを加えて一生懸命に自分がなんで教師になりたいかを説明しました。その後、単元計画書にも記入ミスが見つかるなど、問題もありましたが、何とか乗り切ることができ、結果、無事に合格することができました。

### 4. 東京都の教員採用試験を受ける方へ

私が東京都の教員採用試験を受けて感じたことは、常に世の色々なことに関心を持って、それらに対して自分なりの見識を持つことが大事だと思いました。例えば、多様性の尊重はなぜ重要か？と問われた時に、「現代では多様性を尊重することは当然だ」と結論づけて終わるのではなく、社会・文化・経済、それぞれの側面から見て多様性を尊重することのメリットがあるのではないかと色々な切り口から論題に対して自分なりの答えを導き出せるかが大切です。特に論文試験と個人面接では、その人がどのように物事を捉え考えているかが重視されているように感じました。東京都を受ける予定のある方は、学科の勉強以上に日頃から、教育問題のみならず、様々なことについて友人と話し合いの機会を持ち、大学の授業で議論する機会を持つことが大事だと思います。

## 「教員への2年間」

草野 泰輝

(スポーツ健康学部スポーツ健康学科卒業生)

今回、教員採用試験に向けて勉強してきた約2年間についてお話ししたいと思います。

まず、私が試験に向けて勉強し始めたのは大学3年生の10月頃です。この時期は、教職科目の事前指導があるなど忙しく、その合間を縫って少しずつ始めました。ただ、何から始めていいのかまったく分からず、週に1日、教職課程センターに通い、採用試験を受ける仲間と相談しながら始めました。まずはどういった内容が試験に出て、どういった内容を勉強していくのかということと共有していました。学校の落ち着いた1月頃から週に1枚題材を決め、論文を書いて、友達と添削し合うということを始め、それを試験直前まで約15回行っていました。それは論文を書く上でとても大きな自信につながり、去年も今年も論文に不安なく挑むことができました。教職科目や専門科目に関しては、週に1回教職課程センターで、色々な自治体等の過去問を解き、それ以外は自分で問題集等を用いて勉強していました。4年生になってからは授業も少なく、1日5時間から7時間ほど勉強していたと思います。2次試験は大学で行っている面接対策に参加しました。それは多摩キャンパスだけでなく市ヶ谷キャンパスのものにも参加しました。普段、一緒に勉強をしていない人たちと、いろいろな考えや意見を聞きながら行うことができ、参考になりました。実技の練習は、大学に道具や練習する場所もあるので、仲間と一緒に練習しました。

その後、10月に不合格という結果が出てまず悩んだことが、卒業後どうするかということでした。私は、2次試験の集団討論において、実際の中学校や高校での経験や情報などが足りないことがよくわかったので、講師や支援員をできる場所を探しました。そして、練馬区と板橋区の中学校の学校生活支援員に応募し、面接等を経て、練馬区にある中学校の特別支援学級の学校生活支援員として働くことになりました。

学校生活支援員に関しての主な職務は3つあります。1つ目に、授業中の生徒に対する学習支援です。2つ目に生徒の移動および日常生活上の介助です。3つ目に特別支援教育の推進や学級経営の安定に関することです。大きく言うと、生徒が登校してから帰宅するまで生徒と一緒にいて、支援等を行っています。移動教室や校外学習、運動会などの行事にも関わったり、生徒同士のトラブルでの生徒指導にも関わったりします。授業を教えることがないだけで、実際の教員に近い形で過ごしています。支援員であるため、立場

的に難しい部分が多くありますが、教員に教えられること、また生徒に教えられることがたくさんあります。学校生活支援員として働き始めたことは私にとって、非常に良かったことだと思っています。

私は4月から8時から16時まで学校生活支援員として勤務し、放課後は外部指導員としてバスケットボール部を指導していました。土曜日や日曜日にも部活動があると、採用試験の勉強をする時間を1時間から2時間しか取ることができませんでした。去年とは違い、まとまった時間を取ることができなかったのですが、今年は空いた時間を見つけて少しずつ勉強していました。そういう意味で、1次試験の教職科目や専門科目は、大学4年生の時にしっかりと勉強したことがとてもよかったですと感じました。去年不合格だった2次試験は、早いうちから今勤務している学校の管理職や教員にお願いして、面接の練習や面接表や単元指導計画の添削をしてもらいました。2次試験の面接官は、校長や副校長が行っているため、本番に近い形の練習をさせてもらいました。大学生の時と同じように学校内にも採用試験を受ける人がいたため、情報を共有しながら対策することもできました。実技の練習は、体育科の教員にお願いをし、学校の体育館で練習を行いました。このように学校の管理職や教員に協力してもらい、今年合格することができたと思います。

私がこの2年間で感じたこととして、学生の時から学校に関わるべきだと思います。私は、大学3年生の時から外部指導員として中学校の部活動、学力ステップアップ学生支援員として補習授業の支援員を行っていました。そのように中学生と関わる中で、「教員になりたい」と再度思うことができました。学校現場は年々変わっています。昔にはなかったことが今では当たり前のように行われていることもあります。そういった部分は学校に関わることで知り、学ぶことができると思います。教育現場での経験はとても大切だと思います。現役生にとって大変なのは、1次試験よりも2次試験だと思います。私自身が去年受けたときにそれを痛感しました。実際の学校現場での経験が、2次試験の役に立つと思います。

私は、1人で行うのではなく、色々な人に協力していただくことによって、今年合格することができたと思います。ぜひ、教員採用試験を受ける仲間同士で協力しながら頑張ってもらいたいと思います。

## 「苦悩と曲折の4年」

渡邊 亮

(スポーツ健康学部スポーツ健康学科卒業生)

私は、大学4年生から今年2018年度まで、計4年間にわたり教員採用試験を受けてきました。その中で苦労や勉強方法、対策等を記していこうと思います。

私は大学4年生の時には地元に戻ることを考えていたため、地元である新潟県と、東京都の2つの自治体を受験しました。本命は新潟だったため、この年は新潟県の試験のための勉強のみを行っておりました。しかし、2次試験を突破することができず、卒業後は都内の中学校で支援員をしながら勉強を続け、東京都の試験を受けました。仕事をしながら、試験のためだけに新潟に帰ることが難しかったため、大学卒業後は、東京都一本に絞りました。この経験をもとに、新潟県の1次・2次試験、東京都の1次・2次試験について述べていきます。

### 1. 新潟県

#### (1) 1次試験

新潟県の1次試験は、午前中に①教職教養・一般教養②専門教養③小論文があり、午後に実技試験という体力勝負の面もありました。特筆すべき傾向として、「専門教養の難易度がとても高い」ことが挙げられます。一通りの知識を入れた状態で過去問に臨んでも、5割程度の得点しか取れなかったため、かなり細かいところまで勉強しておく必要があると感じました。ルールや数値など、すべての項目をチェックし、本番に臨みました。自己採点では5割強でしたが、通過することができたため、通過基準点は低いようでした。

一方、教職教養や一般教養、小論文は各分野で50点の配点のため、専門教養と比べて、優先度は低い印象でした。そのため、正直あまり勉強は根を詰めてやるのではなく、大事なところだけをさらう程度でした。

実技は、ハードル走、マット運動、水泳、バレーボール・バスケットボールの選択、柔道・剣道の選択の5種目でした。それぞれの種目は基本的な内容であったため、保健体育の教員を目指している人たちなら、十分に合格点をとることが可能であると思います。

#### (2) 2次試験

2次試験は個人面接のみでした。個人面接の中に、①面接②模擬授業③場面指導の3つの要素がありました。面接や場面指導では、あまり変わったことは聞かれなかったように思います。時事なども準備していましたが、一般的なことを聞かれて終了しました。模擬授業では、教卓の上に紙が一枚置いてあり、その紙に単元名が書いてあるだけでした。その紙を見て5分程度の授業を行うというものでした。どの単元が出題されるか

はわからないため、すべての単元の予習や場慣れが必要不可欠でありました。私には圧倒的に経験が不足していると感じました。地方では即戦力が求められているため、経験や知識の豊富な人材が採用される傾向が強いように感じました。大学生が地方の自治体を受ける際には、経験を補うだけの莫大な知識が必要であると考えます。教職教養等の勉強は、試験だけでなく、面接や小論文にも活かされることがあるので、くまなく勉強したほうがよいと思います。

### 2. 東京都

#### (1) 1次試験

東京都の1次試験は、①教職教養②専門教養③小論文の3つで構成されています。教職教養では、特に教育法規の問題数がとても多いため、細かく確実に覚える必要がありました。教職教養の勉強は、時間がかかるため、毎日の積み重ねで少しずつ覚えるように勉強していきました。まずは知らない言葉を書いてみる、声に出す、友達に問題として出すなどしていく中で、知らなかった言葉が身近に感じられてきて、だんだんと覚えられていきました。カタカナなど馴染みのない言葉は独自の覚え方(頭文字や音など)を使って頭に入れる努力をしました。専門教養は、新潟県の試験を受験するための知識の貯金があったため、少し時事を勉強したのみで試験に臨むことができました。小論文は、とにかく枚数を書くことが重要です。私は、勤務校の校長に10題以上添削をしていただきました。書き方のポイントは、「テーマを自分の持っている柱に寄せること」です。小論文は、序論、本論①、本論②、結論の4段構成にするのが基本です。本論①②に自分の書きやすい内容(私の場合は行事と授業展開の工夫でした)を書き、その内容をテーマにつなげる力を養うことが必要であると思います。こじつけに近い内容も、論理的に並べることで、読んだ人を納得させる文章にすることが可能です。そのため、小論文を書く前に自分の柱を決め、その柱にテーマを近づける技術を、何枚も小論文を書く中で身に付けましょう。

#### (2) 2次試験

新潟県の2次試験と大きく重なるので、省略します。面接に関する能力はとにかく慣れることで向上していきます。回数をこなし、それを録音して、自分で聞き直すことで、さらに良い答えが導き出せると思います。

以上のように、万能な勉強方法というより、自治体に応じた対策をとることで、試験の合格に近づくと考えています。これから受験される方々は、まずは①知識をつける②自治体の傾向を知る③調べた傾向に合わせて勉強をさらに深める、というステップで勉強していくといいと思います。頑張ってください。